梁瀬遺跡（第３次）発掘調査報告

― 津市野田 ―

２０１８（平成30）年２月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は、平成28年度に実施した高度水利機能確保基盤整備事業（野田地区）に伴う梁瀬遺跡（第３次）の発掘調査報告書である。

2　調査地は、三重県津市野田に所在する。

3　発掘調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。発掘調査及び整理作業の経費は、文化庁国庫補助金を得て三重県教育委員会が一部負担し、他は三重県農林水産部から執行委任を受けた。

4　梁瀬遺跡（第３次）の発掘調査期間は、平成29年１月16日～17日である。

5　第３次調査の発掘調査面積は、110㎡である。

6　第３次調査の発掘調査及び整理作業・報告書作成の体制は、以下のとおりである。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

調査研究１課　　主事　杉村　聡（平成28年度）

技師　水谷侃司（平成28・29年度）

7　本書の執筆・写真撮影は水谷があたった。

8　発掘調査および整理作業に際しては、地元野田地区の方々をはじめ、下記の機関に御協力を賜った。記して感謝したい。

三重県農林水産部、津農林水産事務所（敬称略、順不同）

9　調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

凡　例

1　本書では、国土地理院発行の1:25,000数値地図（「津東」相当、平成20年10月発行）、三重県共有デジタル地図の1:2500地形図（060F702番・060F704番）を用いた。

三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（三総合地第１号）。

2　本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。

3　標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

4　本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。

ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　ＳＲ：自然流路　Ｐit：柱穴

5　土色の表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。

6　器種を示す用語、「わん」については、「椀」に統一した。

7　遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

・実測番号は当センター所蔵の遺物実測番号である。

・色調は標準土色帖の色名を記す。

・胎土の緻密さは、粗、やや粗、やや密、密の４段階である。

・焼成状態は、不良、やや不良、やや良、良好の４段階である。

8　写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

目　次

例言・凡例 …… i
目　次 …… ii

Ⅰ　前言 …… 1
1　調査の経緯と経過
2　調査の方法

Ⅱ　位置と環境 …… 2
1　地理的環境
2　歴史的環境

Ⅲ　遺構 …… 4
1　調査概要と基本層序
2　遺構

Ⅳ　遺物 …… 7

Ⅴ　結語 …… 8
1　遺跡の状況
2　おごえ川の流路

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　調査区位置図 …… 3
第３図　調査区配置図 …… 4
第４図　第３次調査土層柱状模式図 …… 4
第５図　調査区平面図① …… 5
第６図　調査区平面図② …… 6
第７図　出土遺物実測図 …… 7
第８図　おごえ川旧流路想定図 …… 8

表 目 次

第１表　遺構一覧表 …… 7
第２表　出土遺物観察表 …… 7

写真図版

写真図版１ …… 9
写真図版２ …… 10
写真図版３ …… 11
写真図版４ …… 12

Ⅰ　前　言

1　調査の経緯と経過

（1）調査に至る経緯

本書で報告する調査は、平成28年度高度水利機能確保基盤整備事業（野田地区）に伴って実施した、埋蔵文化財の記録保存にかかるものである。当事業の主体は三重県農林水産部、実施機関は県津農林水産事務所農村基盤室である。

津市野田地区では、農業用水路のパイプライン化に伴う工事が計画されており、周知の埋蔵文化財包蔵地である梁瀬遺跡が事業地内に存在することが明らかになった。

（2）既往の調査

梁瀬遺跡の発掘調査は、これまでに２度行われている。第１次調査は、中勢道路（一般国道23号線バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で、平成10年に実施された。主な遺物は、平安時代・鎌倉時代を中心とする土師器や山茶椀が出土している。また、古代の官道の可能性のある道路状遺構が確認されている[1)]。

第２次調査は、二級河川岩田川河川改修事業に伴う埋蔵文化財工事立会調査で、平成18年に実施された。弥生土器、土師器、山茶椀などが出土している[2)]。

（3）確認調査の概要

平成25年に確認調査を実施し、幅1.5ｍ、長さ３ｍの調査坑を８箇所設定した（第２図）。調査坑１では、ピットが確認された。調査坑３では、砂層が確認でき、旧流路にあたるものと判断された。調査坑２・４～８では、遺構は確認されなかった。どの調査坑からも遺物の出土は、見られなかった。

上記確認調査を受け、津農林水産事務所と協議を行った結果、中勢バイパス及び県道55号線に接する水田内において工事立会調査による記録保存調査を行うこととなった。

（4）第３次調査の経過

調査期間は、平成29年１月16日～17日である。調査区南東の１区から順に表土を重機により掘削し、記録を取った後、工事施工に移れるよう埋戻しを行った。以下に調査日誌（抄）を記す。

調査日誌（抄）

［平成29（2017）年］

１月13日　事前現地協議。

16日　調査開始。
表土掘削、遺構掘削、遺構実測図作成。

17日　遺構実測図作成、遺構写真撮影。
調査終了。

2　調査の方法

（1）記録保存

遺構平面図は、既知座標点から三辺測量により座標を測定した２点を結ぶ直線を基準として作成した。遺構密度が希薄であったことから、土層断面図は柱状図で作成し、基本層序の把握を行った。

写真の撮影には、一眼レフデジタルカメラを用いた。遺構写真は、ニコンD3300で撮影し、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いた。

遺物写真は、ニコンD800Eを用いた。

（2）文化財保護法にかかる諸手続

本発掘調査に伴う埋蔵文化財の文化財保護法等に関係する法的措置は、以下のとおりである。

①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（県教育委員会教育長あて三重県知事通知）

・平成25年８月30日付け、津農第1088号

②文化財保護法第100条第２項に基づく「埋蔵文化財の発見・認定通知」（津警察署長あて県教育委員会教育長通知）

・平成29年１月19日付け、教委第12－4423号

註

1）三重県埋蔵文化財センター『梁瀬遺跡発掘調査報告』2004

2）三重県埋蔵文化センター『里前遺跡（第３・４次）発掘調査報告』2006

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

梁瀬遺跡（1）は、三重県津市野田に所在している（第1図）。津市西部の長谷山山系を水源地とする岩田川の右岸、岩田川支流のおごえ川により形成された沖積地に位置する。おごえ川は、梁瀬遺跡の東で岩田川に合流し、伊勢湾に流出している。岩田川の左岸には、安濃川によって形成された広大な沖積平野が広がり、その多くが水田や津市の市街地として利用されている。梁瀬遺跡の南側には、標高約30m～40mの半田丘陵が、南北約1.5kmの幅で存在している。

2　歴史的環境

梁瀬遺跡の周辺では、一般国道23号中勢道路（中勢バイパス）建設事業や県営圃場整備事業などに伴い発掘調査が実施され、これまでに多くの重要な発見がなされてきた。特に、古代から中世の遺跡が多くみつかっている。詳細な調査成果については、各報告書にゆだねることとし、ここでは、遺跡の概要を述べ、これらの成果から安濃川・岩田川沖積地の歴史的環境について記す（第1図）。

弥生時代　県指定文化財の「野田銅鐸」は、正確な出土地点は不明であるが、江戸時代に野田の丘陵上から出土し、一身田の専修寺に納められたとの記録がある[1]。安濃川の沖積平野に位置する納所遺跡（2）では、竪穴建物が確認され、多くの弥生土器のほか、石製品、木製農具、動植物遺体が出土している[2]。弥生時代の当該地域における拠点的集落であったと考えられる。

古墳時代　当該地域においては、古墳時代の大規模な集落遺跡は確認されていない。5世紀後半には、半田丘陵の北部に、全長29mのおこし古墳（3）、全長50mの鎌切1号墳（4）、全長34mで木棺直葬の鎌切3号墳（5）などの前方後円墳が築造される。

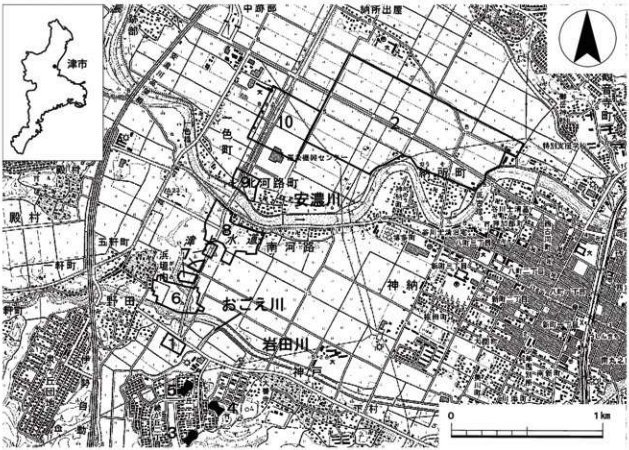
古代～中世　安濃川流域の沖積地では古代から中世にかけての集落遺跡が多くみつかっている。岩田川左岸の里前遺跡（6）では、未使用を含む多量の墨書山茶椀が出土している[3]。このことから、安濃津に集積された物資の2次集積地であったのではないかと指摘されている[4]。弐ノ坪遺跡（7）では、平安時代前期の掘立柱建物が確認されている[5]。安濃川右岸の替田遺跡（8）では、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物が確認されている[6]。安濃川左岸の位田遺跡（9）では、平安時代の掘立柱建物が確認され、多量の緑釉陶器が出土している[7]。蔵田遺跡（10）では、平安時代末から鎌倉時代初めにかけての掘立柱建物が確認されている[8]。

これらの遺跡は、安濃神戸在家集落を構成しているものと考えられ、古代末から中世前半における荘園経営との関わりが想定される。

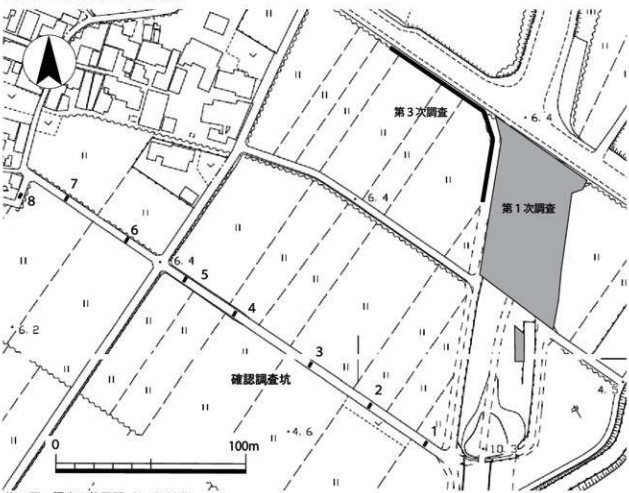
梁瀬遺跡が所在する野田においても、中世には神宮領荘園が存在していたとされ、『神宮雑例集』には「野田御園」、『神風鈔』には「野田御厨」、『外宮神領目録』には「野田御園」との記載がある[9]。

註

1）梅原末治『銅鐸の研究　資料篇』木耳社　1985
2）三重県教育委員会『納所遺跡―遺構と遺物―』1980
3）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う里前遺跡発掘調査報告』2009
4）3）と同じ。
5）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う弐ノ坪遺跡発掘調査報告』　2005
6）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（10工区）に伴う替田遺跡（第1・2次）発掘調査報告』　2008
7）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告』　1999
8）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う蔵田遺跡発掘調査報告』1999
9）『三重県の地名』平凡社　1983



第１図　遺跡位置図（１：25,000）



第２図　調査区位置図（１：2,000）

Ⅲ 遺 構

1 調査概要と基本層序

（1）概要

第３次調査は、国道23号線中勢バイパス及び、県道55号線に面する水田内において幅90cm、延長110mの範囲で行った。今回の調査区は、第１次調査の調査区西側に位置し、発掘調査を進めるにあたり、南東から順に１区から６区までの調査区を設定した（第３図）。遺構は、調査区南東部で希薄であり、調査区北西部で、土坑・溝・流路などを確認した。

（2）基本層序

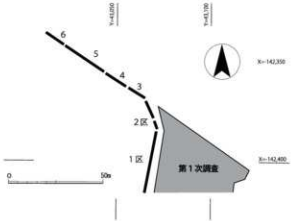
第３次調査で確認された基本層序は以下の通りである。基本層序は土層柱状模式図（第４図）で示す。

１層は、現代の耕作土を含む表土である。２層は、しまりの弱い粘土層で、旧耕作土を含む中世以降の堆積層と思われる。３層は、細粒砂層で２区～６区における遺構面となる層である。４層は、粘土層で１区における遺構面に相当する層である。１区南端にて４層を掘り深めたが、土層の変化は見られなかった。４層は北に行くにしたがい、なだらかに下がっているようで、２区では、４層を確認することができなかった。なお、第３次調査では、４層直上表土中からのみ、遺物の出土が確認されている。５～10層は、遺構埋土である。

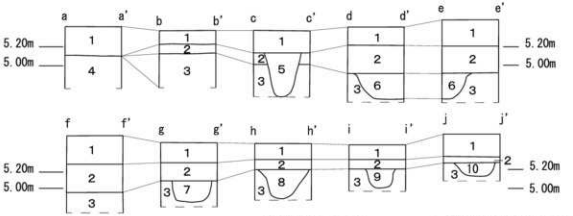
2 遺構

遺構は、３区・４区において自然流路を確認し、５区では土坑・溝・ピットが検出されたものの、１区・２区・６区では希薄な状況がみられた（第５・６図）。また、遺構から遺物は出土しておらず、時期はいずれも不明である。

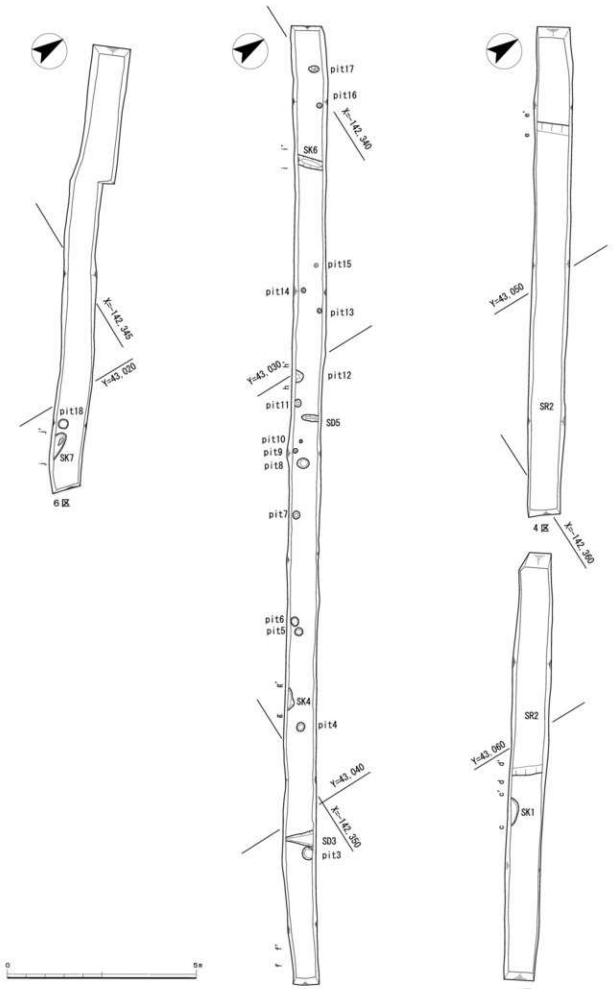
ＳＫ１　３区で確認された土坑である。略円形を呈し、長さ0.75m、幅0.20m、深さ0.46mを測る。遺構埋土は、褐色粘土に黄色粘土ブロックが多く混ざる。遺構が表土直下から切り込み、埋土に地山ブ



第３図　調査区配置図（1：2,000）



第４図　第３次調査土層柱状模式図（1：40）



第５図　調査区平面図①（1：100）

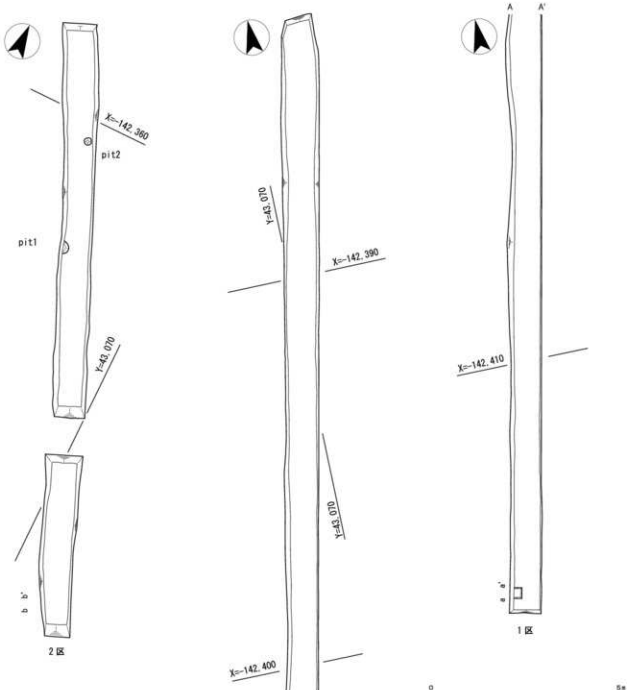
ロックが混ざることから近代以降の土坑の可能性がある。

ＳＫ４　５区で確認された土坑である。略円形を呈し、長さ0.60m以上、幅0.16m以上、深さ0.21mを測る。南西側は調査区外へ続く。埋土は、にぶい黄色細粒砂の単層である。

ＳＫ６　５区で確認された土坑である。略楕円形を呈し、長径0.68m以上、短径0.28m、深さ0.20mを測る。土層の観察から、両端が調査区外へ続く。

ＳＫ７　６区で確認された土坑である。略楕円形を呈し、長径0.72m以上、幅0.30m以上、深さ0.16mを測る。南西側は調査区外へ続く。埋土は、黒褐色細粒砂の単層である。

ＳＤ３　５区で確認された溝である。平面三角形を呈し、長さ0.90m以上、幅0.44m以上、深さ0.22mを測る。両端は調査区外へ続く。



第６図　調査区平面図②（1：100）

ＳＤ５　５区で確認された溝である。略楕円形を呈し、長さ0.46m以上、幅0.18m、深さ0.05mを測る。北西側は調査区外へ続く。

ＳＲ２　３区から４区にかけて確認された、幅17.2m、深さ0.28mの自然流路である。埋土は、黒褐色細粒砂で、しまりはない。土層の堆積状況から流水があったものと考えられる。この自然流路は、遺跡の高低差や位置関係から確認調査の際に、調査坑３で確認された流路と同一流路の可能性がある。梁瀬遺跡の付近を流れる、おごえ川の旧流路または、支流であったのではないかと考えられる。

Ｐｉｔ　２区から５区にかけて、径0.1m～0.35m、深さ0.04～0.31mの柱穴が18基確認された。柱穴は、ＳＲ２の西側、５区において集中している。調査区幅が約90cmと狭かったこともあり、いずれの柱穴も掘立柱建物や柵、柱列になるかは不明である。

第１表　遺構一覧表

調査区	遺構	番号	計測値（m） 長さ 長径	幅 短径	深さ	遺物	備考
3	SK	1	0.75	0.20	0.46	なし	攪乱か
3・4	SR	2	—	17.2	0.28	なし	旧流路か
5	SD	3	0.90	0.44	0.22	なし	
5	SK	4	0.60	0.16	0.21	なし	
5	SD	5	0.46	0.18	0.05	なし	
5	SK	6	0.68	0.28	0.20	なし	
5	SK	7	0.72	0.30	0.16	なし	
2	pit	1	—	0.35	0.14	なし	
2	pit	2	0.20	0.20	0.10	なし	
5	pit	3	—	0.34	0.08	なし	
5	pit	4	—	0.24	0.06	なし	
5	pit	5	0.22	0.22	0.10	なし	
5	pit	6	0.26	0.20	0.10	なし	
5	pit	7	0.22	0.20	0.12	なし	
5	pit	8	0.32	0.28	0.31	なし	
5	pit	9	0.14	0.14	0.14	なし	
5	pit	10	0.10	0.10	0.09	なし	
5	pit	11	0.20	0.20	0.22	なし	
5	pit	12	0.32	0.20	0.30	なし	
5	pit	13	0.14	0.12	0.05	なし	
5	pit	14	0.14	0.12	0.04	なし	
5	pit	15	0.12	0.12	0.07	なし	
5	pit	16	0.14	0.14	0.11	なし	
5	pit	17	0.28	0.18	0.12	なし	
6	pit	18	0.26	0.24	0.10	なし	

Ⅳ　遺　物

第３次調査において出土した遺物の数量はごく少量で、総重量は0.1kgである。また、すべての遺物は、１区４層直上表土中から出土しており、遺構からの出土は確認されなかった。

出土遺物のうち図化することができたのは、灰釉陶器（１）と山茶椀（２）の２点である。

１は、灰釉陶器の皿である。体部内面に灰釉が施されている。高台下面には、灰釉が付着しており、重ね焼き時に、下の皿の釉薬が付着したものと考えられる。残存率は、１/12以下であり、反転復元はできなかった。高台形は逆台形を呈する。高台の形状、及び重ね焼きの状況などから９世紀前葉のものと考えられる[1]。

２は、山茶椀である。高台径7.2cmの底部片で高台形は、三角形状を呈する。底部を回転糸切技法によりロクロから分離したのちに、高台を貼り付けている。高台の形状から12世紀代のもと考えられる[2]。

第７図　出土遺物実測図（１：４）

註

１）愛知県史編さん委員会（編）『愛知県史』別編窯業１古代猿投系　愛知県　2015

２）愛知県史編さん委員会（編）『愛知県史』別編窯業２中世・近世瀬戸系　愛知県　2007、愛知県史編さん委員会（編）『愛知県史』別編窯業３　中世・近世常滑系　愛知県　2012

第２表　出土遺物観察表

NO	実測番号	種類	器種	調査区	遺構層位	部位	法量（cm） 口径	高台径	器高	技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）
1	001-2	灰釉陶器	皿	１区	表土	底部～高台	-	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良好	灰白色 2.5Y8/1
2	001-1	山茶椀	椀	１区	表土	高台	-	7.2	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良好	灰白色 2.5Y8/1

Ⅴ 結 語

1 遺跡の状況

これまで梁瀬遺跡の中心部は、遺跡の東側を流れるおごえ川に向かって標高が低くなっていることから、第１次調査区の西側にあたるものと考えられてきた[1]。今回の調査は、調査区幅の狭い発掘調査とはいえ、第１次調査の西側部分を調査するということもあり、遺跡の中心部分にあたるのではないかと期待されていた。ところが、第３次調査では、５区を除き、遺構密度は薄く、また遺物の出土量もごく微量であった。

さらに、３区から４区にかけて、おごえ川の旧流路と考えられる遺構が確認されており、遺跡の中心部分が存在するとは考え難い。

第３次調査における遺構面となる第３層は、２区南端において標高5.1mと最も高く、ＳＲ２のある３区から４区にかけて、標高4.9m台と最も低くなる。そして、北東方向にかけて高まり、６区では、標高5.2m台となる。このような、遺構面の高低差から梁瀬遺跡において遺構が分布するのは、流路を避けた微高地上であることが明らかになった。このことから、梁瀬遺跡において集落が分布するのは、おごえ川の旧流路帯を避けた微高地上と考えられる。

2 おごえ川の流路

現在のおごえ川は、ほ場整備や河川改修により、野田集落の南部で東側へ直角に曲がり流れている。また、岩田川との合流地点も近年まで、神戸地区よりであったことが分かっている。

また、おごえ川の流路の変化は、これまでの考古学的な調査の成果でも明らかになっている。第１次調査では、調査区南端で流路と考えられる遺構が確認されている。流路及び、流路に浸食されている層の有機物をもとにした、放射性炭素年代測定の結果から、流路は、4000年前頃の堆積層を浸食する形で、2900～2400年前頃に形成されたということが明らかになっている[2]。

一方、今回の確認調査では、流路と思われる砂層が確認されており、それに続くと思われる旧流路の遺構が第３次調査の３区および４区において確認された。この遺構は、おごえ川の旧流路、もしくは、支流であったものと想定される。また、過去の空中写真から地面の乾湿状況が読み取れる（第８図）。そのことから、梁瀬遺跡を縦横断する旧流路が存在した痕跡がみてとれる。

以上のとおり、おごえ川、またはその支流は、古くは梁瀬遺跡の範囲内を通過し、東に向きを変えながら岩田川に合流していたことが想定される。

第８図 おごえ川旧流路想定図（1：5,000）
（国土地理院USA-M208-157に加筆）

註

1）三重県埋蔵文化財センター『梁瀬遺跡発掘調査報告』2004

2）1）と同じ

１区調査区全景（南から）

２区調査区全景（北西から）

３区調査区全景（西から）

４区調査区全景（西から）

５区調査区全景（西から）

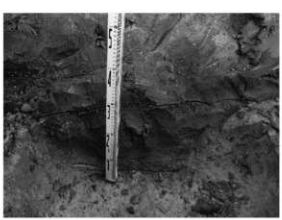
６区調査区全景（東から）

ＳＫ１土層（北から）

ＳＫ４土層（北から）

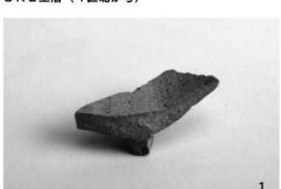
ＳＲ２土層（３区北から）

Pit12土層（北から）

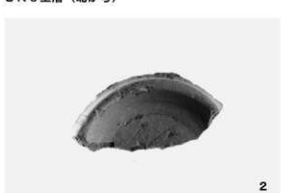


ＳＲ２土層（４区北から）

ＳＫ６土層（北から）



1



2

報告書抄録

ふりがな	やなせいせき（だい３じ）はっくっちょうさほうこく
書名	梁瀬遺跡（第３次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３７６
編著者名	水谷俱司
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596-52-1732
発行年月日	2018(平成30)年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やなせいせき 梁瀬遺跡	みえけんつしのだ 三重県津市野田	201	848	34度 71分 50秒	136度 47分 03秒	2017/1/16 ～ 2017/1/17	110㎡	高度水利機能確保基盤整備事業(野田地区)

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梁瀬遺跡	集落跡	中世	土坑・自然流路	灰釉陶器・山茶椀	

要約

梁瀬遺跡は、津市野田のおごえ川によって形成された沖積地に位置する。主な遺構は、土坑や溝、おごえ川の旧流路か支流と考えられる自然流路が確認された。遺物の数量はごくわずかであるが、灰釉陶器と山茶椀が出土している。梁瀬遺跡は、ベースとなる層が旧流路の位置で最も低く、土坑や柱穴の位置で高くなっていることから、微高地上に集落が形成されたものと考えられる。

三重県埋蔵文化財調査報告３７６
梁瀬遺跡（第３次）発掘調査報告
― 津市野田 ―

2018（平成30）年２月28日
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　共立印刷株式会社